

ニガウリ ‘か交5号’ の分枝性, 開花特性と生産力

田中義弘・鮫島國親・東郷弘之¹⁾
 (鹿児島県農業試験場・¹⁾鹿児島県農産物加工研究指導センター)

Yoshihiro Tanaka, Kunichika Sameshima and Hiroyuki Togo :
 Branching habit, flowering characteristic and productivity of bitter melon ‘Kakou5gou’

鹿児島農試で育成したニガウリ品種 ‘か交5号’ の半促成作型における分枝性, 開花特性, 生産力を把握し, 整枝誘引法などの栽培技術の確立に資する。

1. 材料および方法

無加温中期展張ハウスで試験を行った。品種は ‘か交5号’ を供試し, 台木はカボチャ ‘新土佐1号’ を用い, 2003年2月21日に定植した。定植後約2か月は無整枝で垂直にネットで誘引し分枝性を調査した。その後4月26日に親づる, 子づる10本, 孫づる15本に整枝し棚上に水平にネットで誘引した。子づるは初生葉 (子葉と第1本葉の間に対生する丸葉) および本葉の1~8節に発生したつるを残し, 孫づるは伸長の優れたつるを選んだ。それ以外の側枝は随時切除した。着果法は人工交配で6月30日まで開花・収量調査を行った。供試株数は3株とした。

2. 結果および考察

分枝性: 側枝の発生は多く, 定植1か月後で1株から8本, 定植2か月後で81本発生した。子づるは本葉の13節程度までは順次発生し, それ以降は発生が少なくなり30節以降から再び発生が多くなった。また, 本葉の1~4節から発生した子づるの伸長が優れ, 初生葉から発生した子づる2本がやや劣る傾向がみられた (第1図)。孫づるは初生葉と本葉の1~5節の子づるから多く発生し, 子づるの下節位から発生したつるの伸長が優れる傾向がみられた。

開花特性: 第1雌花着生節位は, 親づるで16節, 子づるで7節, 孫づるで6節であった。雌花着生率は親づる25%, 子づる32%, 孫づる27%と子づるが最も高かった。着生した雌花の開花率は親づる68%, 子づる62%, 孫づる73%と子づるが低かった。また, 全節あたりの開花した雌花の割合は親づる17%, 子づる20%, 孫づる20%で大きな差はなかった (第1表)。子づるでは初生葉と本葉の1~4節に発生したつるが雌花着生が多い傾向がみられた。「開花に至らない雌花」は着果負担が大きな時期に発生が多くみられ, 着果過多による同化養分の競合, 養分不足が影響していると考えられた (第2図)。

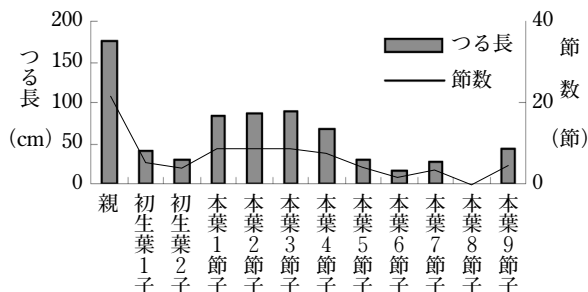
生産力: 枝別の収量は子づる>親づる>孫づるの順で, 子づるが最も多かった。子づるでは初生葉と本葉1~4節に発生した枝の収量が多く, 特に本葉1節から発生した子づるが多かった (第3図)。初生葉から発生した子づる2本は本葉の1~4節の子づるに比べて収穫開始期がやや遅かった。

以上のことから ‘か交5号’ の分枝性, 開花特性, 生産力が明らかになった。また, 着果負担が雌花の開花に大きく影響していると考えられた。

第1表 枝別の開花特性

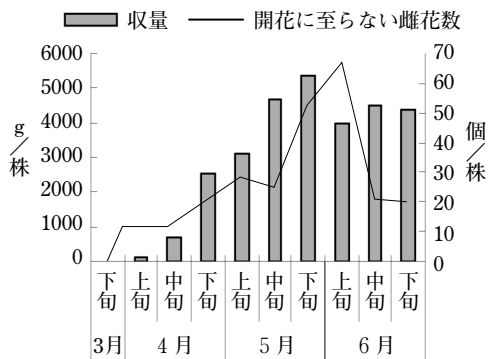
項目	第1雌花着生節位(節)	雌花着生率(%)	同左開花率(%)	開花雌花率(%)	開花日(月/日)
親づる	16	25	68	17	3/20
子づる	7	32	62	20	3/30
孫づる	6	27	73	20	4/19

注) 各枝70節までの調査。
 雌花着生率=着生雌花数/節数×100。
 開花雌花率=開花した雌花数/節数×100。

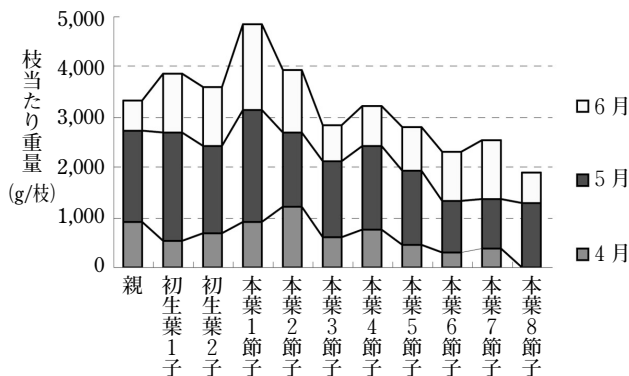


第1図 定植1か月後の親・子づるの生育

注) 本葉1節子: 第1本葉の節から発生した子づる。



第2図 株当たりの開花に至らない雌花数と収量



第3図 親・子づるの枝当たりの時期別収量